
明治大学博物館所蔵

前場幸治 瓦コレクション

資料目録



序

2010年2月、前場工務店代表取締役であった前場幸治氏（1933～2011）から明治大学に瓦の一大コレクションが寄贈されました。神奈川県千代廃寺の研究をはじめ、古瓦の研究者として著名であった前場氏が数十年にわたって精力的に収集したコレクションは、全国各地の国分寺や城郭の瓦はもちろん、近現代の瓦や中国・朝鮮、中央アジアなど海外の資料にまでおよび、国内でも屈指の内容をもつ個人コレクションとして知られています。明治大学博物館では、墨書土器の研究等で古代学研究所のパイオニアとなっている明治大学日本古代学研究所（吉村武彦所長）と共同で3年間にわたって整理作業を進め、その全容の解明に取り組んできました。その結果、総数約1万点におよぶコレクションは、瓦製作道具や拓本なども含み、日本の瓦の歴史が凝縮された総合的なコレクションであることが明らかになりました。

前場コレクションの寄贈を記念した企画展「古瓦を追って」（2010年夏）をはじめ、天平期の瓦に焦点を当てた特別展「天平の華 東大寺と国分寺」（2013年秋）のほか、3回の小企画展の開催や広報誌・博物館紀要での資料紹介など、明治大学は随時さまざまな形で学界や市民に対しコレクションの周知に努めてきました。このたび、整理作業の節目を迎えるにあたって、主要な資料をまとめた目録を制作しました。本書に収録したものは膨大なコレクションのうちのごく一部ですが、目録化によってさらに多くの研究者や市民の方々がコレクションについて知る機会を得て、研究資料としての活用が促進されることを期待します。

前場氏の瓦資料の森は深く、そして豊かです。氏が残して下さったこの貴重な学術資料が、より広く、そして多くの方々に活用されることを願ってやみません。

最後に、整理作業と本書の刊行にあたり、ご協力いただいた皆様とご夫人の前場葉子様がこの場をお借りして心から御礼申し上げます。

2014年3月

明治大学博物館

館長 風間 信隆

凡 例

- ・本目録は、明治大学で所蔵されている前場幸治瓦コレクションの主要資料を掲載したものであり、本目録に掲載されている資料は、すべて明治大学博物館に保管されている。
- ・計測値の単位は、すべてcmで統一している。発掘調査以外の資料に関する出土遺跡や場所は、基本的に前場幸治氏からのご教示によるが、その後の調査で新たに判明したものは逐次追加し、更新している。
- ・図版番号は、各章ごとに通し番号が付けられている。() 内の数字は、資料番号である。
- ・本目録は、2010年度から2013年度にかけて、明治大学博物館と明治大学日本古代学研究所（所長：吉村武彦 明治大学文学部教授）が共同で実施した前場幸治瓦コレクションの整理作業成果報告の一部である。整理作業は、山路直充（市立市川考古博物館・明治大学文学部非常勤講師・明治大学日本古代学研究所研究分担者・明治大学博物館研究調査員）の主導のもと、鈴木知子（明治大学博物館研究調査員）、森本尚子（明治大学博物館研究調査員）、忽那敬三（明治大学博物館）および古豊裕次朗（※明治大学博物館：2010～2012年度）、土谷あゆみ（明治大学博物館：2013年度）が担当した（※整理年度当時の所属）。整理作業に参加した方々は下記の通りである（五十音順、敬称略）。

石村 史 井上駿祐 岩田 薫 勝田晶子 小勝紅子 杉木有紗 高橋直也 田口 慎 土屋志帆 長島弥生
林 和也 宮崎哲平 武藤ふみ子（拓本整理担当） 村井大海 望月 蛭

- ・本目録は、山路直充・森本尚子・忽那敬三が体裁を決め、森本尚子と忽那敬三が執筆し三者で編集した。執筆分担は各項目の文末に示している。写真図版・資料情報一覧の作成は土谷あゆみと伊藤友香子（明治大学博物館）が主に担当した。
- ・本目録の表紙装丁は石井デザイン事務所が行い、印刷用本文レイアウト作成は島田和高（明治大学博物館）が担当した。
- ・本コレクションの整理及び調査にあたり、以下の研究者の方々にご教示及びご協力を賜った。また、前場幸治氏夫人の前場葉子氏には、多大なるご協力を賜った。記して謝意を申し上げます（五十音順、敬称略）。

青木祐介 上村和直 大脇 潔 金子 智 清水昭博 向井佑介

表紙写真：千代廃寺重圍文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦（「大伴五十戸」記銘 神奈川県小田原市 撮影：清地涼太氏）

裏表紙写真：鬼瓦（大黒天 和歌山県）

目次

序

凡例

前場幸治瓦コレクションの概要	5
1 中国・朝鮮の瓦	7
2 飛鳥時代の瓦	15
3 奈良・平安時代の瓦	24
4 文字瓦	52
5 中・近世以降の瓦	56
6 鬼瓦	60
7 瓦製作道具	64
8 瓦以外の考古資料	68

参考文献

英文要旨

前場幸治瓦コレクションの概要



前場幸治氏（1933～2011）

神奈川県厚木市の前場工務店代表取締役であった前場幸治氏は、江戸時代以来親子3代にわたる大工・棟梁として知られ、本業の傍ら技能の継承と研究を行い、数々の著書を世に送り出した。あわせて、日本の木造建築に深くかかわる瓦についても高い関心を寄せ、国内・国外を問わず幅広く資料を収集するとともに、全国各地の国分寺跡に足を運び、研究を進めた。

氏の地元である神奈川県小田原市の千代廃寺の研究をまとめた『古瓦を追って―相模国分寺、千代台廃寺考―』は千代廃寺研究の基礎資料として高く評価されており、前場氏が所蔵する古代の文字瓦を含む瓦資料は国内でも屈指の個人コレクションとして知られていた。前場氏はそれらの資料について、本業に関係する大工道具の一大コレクションとともに厚木市の前場資料館で一般に公開し、収集と研究を精力的に行ったのである。

2010年2月、研究機関でコレクションを学術的に活用してほしいという前場氏のご厚意により、かねてより文字瓦の研究を通して交流があった明治大学日本古代学研究所の吉村武彦所長と同研究所の研究分担者である山路直充氏（市立市川考古博物館）を介して、明治大学に瓦と考古資料のコレクションが一括して寄贈されることになった。代表的な資料のほかに、数千点に及ぶ関連資料もあわせて寄贈されたことから、明治大学は明治大学博物館と明治大学日本古代学研究所によって特別な体制を整え、3年間にわたって集中的な整理作業を行い、膨大なコレクションの全容解明に取り組んできた。並行して寄贈記念企画展「古瓦を追って」（2010年）、特別展「天平の華 東大寺と国分寺」（2013年）のほか、3回の小企画展の開催や博物館広報誌への資料紹介の掲載等、学界や市民への周知に努めている。

前場氏のコレクションは①日本の古代の瓦、②日本の中世から現代の瓦、③中国・朝鮮などアジアの瓦（古代～現代）、④現代の瓦の製作道具や屋根材、⑤その他の考古資料（縄文時代～近世）、⑥絵画等、⑦瓦に関する書籍と前場氏が作成した瓦の拓本や研究用の瓦のデータカード類、に大別でき、①～⑥は約9,300点、⑦も含めた総数は約11,000点にのぼることが整理作業によって明らかになった。コレクションの中核をなす瓦は、古代から現代の資料が揃い、日本の瓦史が凝縮されているともいえる総合的なコレクションである。

特に日本の古代は平城京の軒丸瓦、天平文化を代表する東大寺創建期の軒丸瓦など中央の寺院や官衙の資料があ

り、さらに国分寺の瓦資料は全国にわたっており、質・量ともに充実した内容を誇る。なかでも注目されるのは文字が残る記銘瓦の一群であり、古代の地方行政単位である里に相当する「サト」の単位で瓦生産が行われていたことを示す千代廃寺の「大伴五十戸」記銘軒丸瓦は、国内でわずか3例しか確認されていない貴重な資料である。また、葺き替えによって廃棄されがちな近現代の瓦や、骨董ではないため収集されにくい瓦製作道具の存在は、前場氏ならではの幅広い研究視点を示すものと言えよう。あわせて、現在では入手が困難なものも含まれる瓦研究関連文献、約3,600枚に及ぶ各地の所蔵機関を訪れて採取した国分寺出土瓦の拓本（表1）や調査カード類は、研究機関である大学にとって特に重要な資料である。

このように、前場幸治瓦コレクションは、今後の日本の瓦研究の進展に大きく寄与しうる、国内でも屈指の資料群として位置づけられる。本目録は、その主要な資料を紹介することを目的とし、次章以降でコレクションの各分野の特色を述べる。

(忽那)

表1 前場幸治瓦コレクションの拓本資料一覧

No.	タイトル	No.	タイトル
1	下野国分寺拓本集	45	千代台廃寺拓本集 松田庶子窯跡より
2	陸奥国分寺・多賀城廃寺 拓本集	46	横須賀市宗元寺 鎧瓦・宇瓦
3	上野国分寺・下野国分寺・下野薬師寺 拓本集	47	平塚市 四之宮廃寺跡
4	下野薬師寺拓本集	48	発掘時の平瓦
5	三村山清冷院・結城廃寺他・新治廃寺 拓本集	49	川崎市 影向寺
6	上総国分寺拓本集	50	川崎市菅寺尾台廃寺他
7	石岡市常陸国分寺（尼寺を含む）	51	伊勢原市・日向薬師 平瓦拓本集
8	上総国分寺拓本集	52	各所の古瓦雑多に入る。
9	結城国分寺・常陸国分寺・新治国分寺 拓本集	53	平安宮・東大寺・大和山村廃寺・近江南滋賀廃寺拓本集
10	出雲国分寺拓本集	54	伊勢薬師寺・山町塚瓦経拓本集
11	国分寺古瓦拓本集作成時 所蔵者から集めた拓本	55	大和海会寺・山田寺・河原寺・薬師寺拓本集
12	各国分寺瓦拓本集	56	伊勢寺・天花寺・豊田寺拓本集
13	三河国分寺拓本集	57	大和豊浦寺・大和奥山久米寺・大和横井廃寺・山城拓本集
14	佐渡国分寺拓本集	58	法勝寺・醍醐寺・東福寺・その他拓本集
15	駿河国分寺拓本集	59	小田原城瓦拓本集 鎧瓦・宇瓦文様まじり
16	沓岐国分寺拓本集	60	小田原城瓦拓本 韓国瓦拓本
17	周防国分寺拓本集	61	小田原城瓦拓本
18	山梨県甲斐国分寺・寺本廃寺拓本集	62	小田原城4・一夜城9・駿府城2・鶴岡八幡宮2・大垣城6 瓦拓本集
19	信濃国分寺拓本集	63	小田原城瓦拓本集
20	信濃国分寺拓本集	64	小田原城瓦拓本集 鎧瓦巴文様
21	佐渡国分寺・安芸国分寺・周防国分寺・備後国分寺拓本集	65	小田原城瓦拓本集 鎧瓦巴文様
22	出雲国分寺・隠岐国分寺拓本集	66	小田原城瓦拓本集 宇瓦
23	伊勢国分寺拓本集	67	一夜城瓦拓本集 巴鎧瓦・平瓦・戯画瓦
24	伊豆国分寺拓本集	68	小田原城瓦拓本集 宇瓦
25	武蔵国分寺文字瓦	69	小田原城瓦拓本集 三ツ葉葵文様鎧瓦
26	武蔵国分寺鎧瓦・宇瓦	70	小田原城瓦拓本集 宇瓦
27	武蔵国分寺跡出土 植物・馬の戯画瓦他	71	小田原城瓦拓本集 文字平瓦
28	武蔵国分寺出土瓦	72	小田原城瓦拓本集 菊花文様棟込瓦
29	武蔵国分寺拓本集	73	小田原城瓦拓本集 三ツ葉葵文様
30	武蔵国分寺 宇瓦.	74	小田原城瓦拓本集 菊花文様
31	武蔵国分寺 鎧瓦・宇瓦・文字瓦他.	75	小田原城瓦拓本集 前場幸治所蔵
32	武蔵国分寺 平瓦叩文様.文字瓦	76	小田原城瓦拓本集 菊花文様丸瓦
33	武蔵国分寺 鎧瓦.宇瓦.文字瓦他.	77	小田原城瓦拓本集 巴文様鎧瓦(棟込)
34	武蔵国分寺 古代瓦	78	小田原城瓦拓本集 文字平瓦
35	武蔵国分寺 文字瓦.	79	小田原城瓦拓本集ダブリ 三ツ葉葵文様鎧瓦
36	武蔵国分寺 所蔵瓦拓本集	80	高句麗瓦拓本集 I
37	本多章吉氏 所蔵瓦拓本集 武蔵国分寺 鎧瓦.須恵器小片.	81	高句麗瓦拓本集 II
38	武蔵国分寺 拓本集	82	朝鮮瓦拓本集
39	上野国分寺 拓本集	83	朝鮮瓦拓本集 I
40	相模国分寺 拓本集	84	久保田氏拓本集(久保田正男氏拓本)
41	相模国分寺 拓本集	85	古代瓦各所 前場所蔵瓦拓本集 I
42	古瓦を追って(相模国分寺.千代台廃寺) 使用拓本	86	各所の古瓦 前場所蔵瓦拓本集 II
43	千代台廃寺 拓本集	87	板碑拓本集 松田光氏所蔵 採扱 松田光
44	国府本郷付近所在の鬼瓦その他 千代台廃寺拓本集 平瓦叩き文様.窯跡出土地		

1 中国・朝鮮の瓦



楽浪「大晋元康」銘垂木先瓦 図版 1-4 (2860)

中国では紀元前 1050 年頃の西周で初めて瓦（平瓦）が使われた。そして、春秋戦国時代には丸瓦の先端をふさぎ、文様を施した軒丸瓦が出現する。春秋戦国時代・秦では半円形の半瓦当が流行するが、漢に至ると円瓦当に変化する。瓦当文様は秦・漢では雲文・文字文・動物文、隋・唐では蓮華文が採用された。長らく凝った文様を飾るのは軒丸瓦のみで、軒平瓦は重弧文と呼ばれる何本かの弧線を描いたシンプルな文様のものが使われていたが、遼では龍文の軒平瓦が出現している。これは型作りによるもので、はじめは長方形、のちに逆三角形（滴水瓦）のものが作られた。龍文の滴水瓦は金・元でも使われ、明・清ではこれに黄釉などの釉薬がかけられ、美しい瑠璃瓦として宮殿等の屋根を飾った。

朝鮮半島では楽浪郡で初めて瓦が使われたようである。そして、三国時代の高句麗・百済・新羅では宮殿・寺院等に盛んに瓦が葺かれた。三国の瓦当文様には主に蓮華文が採用される。百済・新羅の蓮華文は素弁蓮華文と呼ばれる一重の桜のような文様、対して高句麗のものは蓮蕾文と呼ばれる蓮のつぼみを表現した特徴的な文様を持つ。統一新羅になると瓦当文様はがらりと変わり、宝相華文等の華やかなものになる。またこの頃、軒平瓦が出現する。高麗は、高句麗の系譜を引く瓦当文様を採用した。李氏朝鮮になると、明・清に通じる龍文を飾った瓦や、明・清の皇帝名を持つ瓦が作られた。

前場コレクションでは、まず漢の「元延元年都司空瓦」銘平瓦が挙げられる。「元延元年」は紀元前 12 年、「都司空」は役所名で、「紀元前 12 年に都司空によって作られた瓦」の意味の刻印をもつ平瓦である。紀元前 108 年に漢が朝鮮半島に設置した楽浪郡の「大晋元康」銘垂木先瓦は、西晋・恵帝の元康年間 (291 ~ 299 年) の瓦で、楽浪郡終末期に作られたものである。中央に釘穴があることから垂木先瓦とわかり、また穴のあいていない同文の軒丸瓦もある。清の龍文軒平瓦は、皇帝の象徴である五本爪の龍が描かれている。

高句麗の蓮蕾文軒丸瓦はいずれも赤焼きで、平壤遷都 (427 年) 以降のものである。渤海の指頭文軒平瓦は同様のものが高句麗にもあり、同じく高句麗の蓮蕾文の系譜を引くハート文軒丸瓦と組んで屋根を飾ったのであろう。統一新羅の軒平瓦には特徴的な額面施文が施されるものがあるが、紹介した資料はいずれも額面施文を持たない。李氏

朝鮮の丸瓦には明の17代皇帝「崇禎」の名が、望瓦（棟端を飾る瓦）には清の3代皇帝「順治」・9代皇帝「咸豊」の名が見え、明・清と朝鮮の主従関係がうかがわれる資料である。

加えて、日本では珍しい資料として鬼龍子がある。鬼龍子は中国や朝鮮で主に使われ、神獣等を象り魔除けや火災除けを目的として屋根の降り棟に設置されたものである。初源は中国の宋代にさかのぼるとみられ、元・明・清代を通して宮殿等の屋根を飾った。紫禁城の太和殿には、一つの棟に麒麟・鳳凰・獅子・天馬等11体もの鬼龍子が乗る。朝鮮でも宮殿等に用いられたが、神獣ではなく、西遊記の登場人物が表現される点で中国とは大きく異なる。

中国の鬼龍子に表現されるのは①騎鳳仙人（鳳凰に乗った仙人）、②麒麟、③鳳凰、④獅子、⑤海馬、⑥天馬（ペガサス）、⑦狻猊（獅子に似る）、⑧押魚（魚に似る）、⑨獬豸（虎に似る）、⑩斗牛（龍に似るが蹄を持つ）、⑪行什（鎧を着た猿）である。これらは、「龍生九子」と呼ばれる龍が生んだ九匹の子（蒲牢、嘲風、饕餮、狻猊、蚣蝱、睚眦）との関連が考えられる。なお、「龍生九子」とは対応しないが、騎鳳仙人は三蔵法師、行什は孫行者とされ、朝鮮の鬼龍子が西遊記の登場人物であるのは、これと関連するとみられる。また、天馬・海馬は、皇帝の徳が天に通じ、大海にまで至ることを象徴しているとされる（森本・鈴木2013）。

前場コレクションには14点のまとまった資料群がある。中国の北宋から明代の資料は海馬や獅子を象っており、特に明代以降のものは釉がかかり、鮮やかである。19世紀頃と考えられる朝鮮の資料は、帽子をかぶる三蔵法師とみられる人物で、釉が無く前傾でひざまずく姿勢に特徴がある。清代とされる4点の資料は鬼龍子に含めているが、背面の剥離状況から軒先等の先端に貼り付けたものとみられ、設置方法に大きな違いがある。また、宮人風の人物や踊る人物などを細やかな色使いと造形で表現しており、性格的にも鬼龍子とは異なる可能性がある。

（森本）



明 鬼龍子 図版 1-37 (720)

1 中国・朝鮮の瓦



1-1



1-2

1-1 (346) 漢
「元延元年(紀元前 12) 都司空瓦」 銘
平瓦
残存幅：13.3 厚さ：1.6

1-2 (7971) 漢
軒丸瓦
残存径：7.5 瓦当厚：1.6



1-3



1-4

1-3 (2556) 漢
軒丸瓦
残存径：5.2 瓦当厚：1.4

1-4 (2860) 楽浪郡
「大晋元康」 銘垂木先瓦
残存径：7.5 瓦当厚：1.9



1-5



1-6

1-5 (2215) 鄴城(東魏・北齊)
「九三□」 銘丸瓦
残存長：14.1 幅：13.4 厚さ：2.8

1-6 (2481) 宋
蓮華文軒丸瓦
直径：13.2 瓦当厚：1.4



1-7



1-8

1-7 (2820) 清
龍文軒丸瓦
直径：10.0 瓦当厚：1.6

1-8 (2570) 清
龍文軒平瓦
上弦幅：20.4 瓦当厚：10.1

1 中国・朝鮮の瓦



1-9



1-10

1-9 (2717) 高句麗
蓮蕾文軒丸瓦
直径：14.0 瓦当厚：3.5

1-10 (2721) 高句麗
蓮蕾文軒丸瓦
直径：17.1 瓦当厚：2.7



1-11



1-12

1-11 (2861) 高句麗
蓮蕾文軒丸瓦
直径：15.2 瓦当厚：2.5

1-12 (2718) 高句麗
蓮蕾文軒丸瓦
復元径：17.2 瓦当厚：3.0



1-13



1-14

1-13 (2670) 古新羅
素弁蓮華文軒丸瓦
復元径：15.6 瓦当厚：2.1

1-14 (200) 古新羅
素弁蓮華文軒丸瓦
復元径：14.7 瓦当厚：4.0



1-15



1-16

1-15 (202) 統一新羅
宝相華文軒丸瓦
直径：11.5 瓦当厚：2.0

1-16 (923) 統一新羅
蓮華文軒丸瓦
直径：12.9 瓦当厚：2.5

1 中国・朝鮮の瓦



1-17



1-18

1-17 (2679) 統一新羅 (興輪寺)
蓮華文軒丸瓦
直径：13.9 瓦当厚：2.9

1-18 (2674) 統一新羅 (半月城)
蓮華文軒丸瓦
直径：14.3 瓦当厚：1.9



1-19



1-20

1-19 (908) 統一新羅 (天官寺)
蓮華文軒丸瓦
直径：13.8 瓦当厚：2.3

1-20 (204) 統一新羅
唐草文軒平瓦
残存幅：23.2 瓦当厚：5.7



1-21



1-22

1-21 (2228) 統一新羅
宝相華文軒平瓦
残存幅：16.8 瓦当厚：5.8

1-22 (2087) 渤海
指頭文軒平瓦
残存幅：13.2 瓦当厚：2.0



1-23



1-24

1-23 (2128) 高麗
日暉文軒丸瓦
直径：15.0 瓦当厚：2.6

1-24 (2524) 高麗
日暉文軒丸瓦
直径：13.4 瓦当厚：2.5

1 中国・朝鮮の瓦



1-25



1-26

1-25 (2144) 高麗
蓮蕾文軒丸瓦
直径：18.8 瓦当厚：3.7

1-26 (510) 高麗
鬼面文軒平瓦
上弦幅：33.0 瓦当厚：5.0



1-27



1-28

1-27 (2129) 李氏朝鮮
蓮華文軒丸瓦
直径：15.7 瓦当厚：4.2

1-28 (2681) 李氏朝鮮
蓮華文軒丸瓦
長さ：16.4 幅：14.5 瓦当厚：2.0



1-29



1-30

1-29 (2351) 李氏朝鮮
龍文軒平瓦
上弦幅：25.0 瓦当厚：13.5

1-30 (2745) 李氏朝鮮
「大崇禎」銘丸瓦
長：33.5 幅：15.6 厚さ：2.0



1-31



1-32

1-31 (208) 李氏朝鮮
「順治十四年」銘望瓦
上弦幅：30.0 瓦当厚：15.5

1-32 (2798) 李氏朝鮮
「咸豐三年」銘望瓦
上弦幅：23.3 瓦当厚：19.5

1 中国・朝鮮の瓦



1-33



1-34

1-33 (726) 李氏朝鮮
鬼龍子 (人物 三蔵法師?)
高さ：31.5 幅：8.9 奥行：27.0

1-34 (718) 北宋～南宋 (揚州寒山)
鬼龍子 (海馬)
高さ：31.0 幅：13.0 奥行：19.7



1-35



1-36

1-35 (723) 北宋～南宋
鬼龍子 (海馬)
高さ：23.5 幅：9.4 奥行：15.5

1-36 (719) 明中期以前 (揚州)
鬼龍子 (斗牛)
高さ：30.8 幅：14.9 奥行：23.5



1-37



1-38

1-37 (720) 明
鬼龍子 (獅子)
高さ：27.4 幅：14.2 奥行：26.5

1-38 (725) 明 (貴州省)
鬼龍子 (獅子)
高さ：22.5 幅：14.4 奥行：11.8



1-39



1-40

1-39 (721) 清末 (光緒帝) (山東省泰山)
鬼龍子「泰山石敢當」(椒図)
高さ：24.0 幅：10.6 奥行：21.7

1-40 (722) 清末 (光緒帝) (雲南省)
鬼龍子 (獅子)
高さ：20.5 幅：7.3 奥行：10.4

1 中国・朝鮮の瓦



1-41



1-42

1-41 (544) 清
鬼龍子 (人物 宮人?風)
高さ: 17.4 幅: 12.3 奥行: 11.6

1-42 (545) 清
鬼龍子 (人物 ペルシャ人? 踊る人)
高さ: 29.6 幅: 13.9 奥行: 9.8



1-43



1-44

1-43 (740) 清
鬼龍子 (人物)
高さ: 23.7 幅: 7.4 奥行: 6.7

1-44 (741) 清
鬼龍子 (人物)
高さ: 16.0 幅: 26.8 奥行: 7.9

2 飛鳥時代の瓦



海会寺軒丸瓦 図版 2-9 (323)

日本の瓦生産は、日本最古の寺院である飛鳥寺の造営に始まる。『日本書紀』崇峻元年（588）の記事には、百済から寺院造営における各方面の技術者と共に瓦作りの技術者が渡来したと記されており、事実、飛鳥寺の軒丸瓦の文様は百済のものと酷似している。飛鳥寺ののち、聖徳太子と関連のある法隆寺若草伽藍・四天王寺、飛鳥の地に百済大寺・山田寺・川原寺等の寺院が次々と建てられた。前場コレクションには、最も古式の八島寺の素弁蓮華文軒丸瓦や、百済大寺（吉備池廃寺）と同範の海会寺の素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦、山田寺の重圏文縁単弁八葉軒丸瓦とその系統の下総龍角寺等の山田寺式軒丸瓦、川原寺の面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦とその系統の下野薬師寺の川原寺式軒丸瓦等がある。

また、天智天皇の御代には大津宮とその周辺寺院、天武天皇・持統天皇の御代には、日本初の瓦葺宮殿である藤原宮とその京内寺院が造営されるが、この時期の瓦として、南滋賀廃寺・崇福寺の軒丸瓦、藤原宮の瓦、本薬師寺・大官大寺の瓦がある。

しかし最も前場コレクションを特徴づける瓦は、相模千代廃寺の瓦であろう。千代廃寺の創建軒丸瓦は、石川廃寺式の重圏文線鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦と重圏文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦の2型式3種がある。重圏文縁細弁十六葉蓮華文のものの中房が平らなものと（①）、突出したものと（②）の2種類があるが、異範ではなく①→②へ彫り直したものである。重圏文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦（中房平ら）の瓦当側面には、焼成後に「大伴五十戸」の文字が書かれており、非常に注目される資料である。

（森本）

2 飛鳥時代の瓦



2-1



2-2

2-1 (459) 八島寺 (奈良県)
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：15.6 瓦当厚：2.2

2-2 (2468) 八島寺？
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.7 瓦当厚：3.1



2-3



2-4

2-3 (342) 九頭神麁寺 (大阪府)
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.8 瓦当厚：3.0

2-4 (327) 禅寂寺 (大阪府)
素文縁重弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.3 瓦当厚：3.9



2-5



2-6

2-5 (2414) 出土地不明
珠文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦 (小型)
復元径：8.3 瓦当厚：1.7

2-6 (2183) 宮井麁寺 (滋賀県)
雷文縁単弁蓮華文軒丸瓦
残存径：6.7 瓦当厚：1.7



2-7



2-8

2-7 (2113) 茨城麁寺 (茨城県)
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.5 瓦当厚：4.0

2-8 (2231) 出土地不明
珠文縁単弁蓮華文軒丸瓦
残存径：9.0 瓦当厚：2.3

2 飛鳥時代の瓦



2-9



2-10

2-9 (323) 海会寺 (大阪府)
素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.2 瓦当厚：2.7

2-10 (326) 山田寺 (奈良県)
重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：14.5 瓦当厚：2.5



2-11



2-12

2-11 (2863) 山田寺
重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.8 瓦当厚：2.0

2-12 (340) 山田寺
重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.6 瓦当厚：2.8



2-13



2-14

2-13 (2127) 山田寺
重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：15.8 瓦当厚：2.3

2-14 (2092) 山田寺
四重弧文軒平瓦
残存幅：9.5 瓦当厚：4.0



2-15



2-16

2-15 (3101) 山村廃寺 (奈良県)
鋸齒文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：19.2 瓦当厚：3.9

2-16 (2086) 山村廃寺
忍冬唐草文軒平瓦
残存幅：11.9 瓦当厚：5.4

2 飛鳥時代の瓦



2-17



2-18

2-17 (2560) 西琳寺 (大阪府)
重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：6.3 瓦当厚：1.8

2-18 (3103) 下総龍角寺 (千葉県)
重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：9.1 瓦当厚：3.6



2-19



2-20

2-19 (2434) 下総龍角寺
三重弧文軒平瓦
残存幅：12.0 瓦当厚：3.6

2-20 (2210) 下総龍角寺
三重弧文軒平瓦
残存幅：14.2 瓦当厚：3.3



2-21



2-22

2-21 (2164) 高宮廃寺 (大阪府)
重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.3 瓦当厚：2.3

2-22 (2181) 八島廃寺 (滋賀県)
重圏文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.4 瓦当厚：1.8



2-23



2-24

2-23 (2519) 和泉池田寺 (大阪府)
単弁蓮華文軒丸瓦
残存径：9.5 瓦当厚：2.4

2-24 (2684) 出土地不明
素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.4 瓦当厚：1.7

2 飛鳥時代の瓦



2-25



2-26

2-25 (435) 川原寺 (奈良県)
面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：19.0 瓦当厚：2.6

2-26 (3100) 橘寺 (奈良県)
複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：16.8 瓦当厚：3.2



2-27



2-28

2-27 (916) 法隆寺西院伽藍
複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.7 瓦当厚：3.3

2-28 (2618) 法隆寺西院伽藍
忍冬唐草文軒平瓦
残存径：8.6 瓦当厚：5.8



2-29



2-30

2-29 (418) 南滋賀廃寺 (滋賀県)
面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.4 瓦当厚：3.2

2-30 (2206) 南滋賀廃寺
面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：18.4 瓦当厚：1.4



2-31



2-32

2-31 (2320) 崇福寺 (滋賀県)
面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.0 瓦当厚：1.8

2-32 (2028) 南滋賀廃寺？
方形瓦 (丸瓦)
長さ：35.8 残存幅：16.8 厚さ：2.3

2 飛鳥時代の瓦



2-33



2-34

2-33 (440) 藤原宮
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：19.4 瓦当厚：3.6

2-34 (2090) 藤原宮
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：14.6 瓦当厚：2.7



2-35



2-36

2-35 (2694) 藤原宮
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：18.8 瓦当厚：4.8

2-36 (2222) 藤原宮
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：13.1 瓦当厚：4.0



2-37



2-38

2-37 (337) 本薬師寺(奈良県)
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.6 瓦当厚：2.6

2-38 (4744) 本薬師寺
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：9.1 瓦当厚：2.7



2-39



2-40

2-39 (2371) 本薬師寺
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦(裳階用)
復元径：15.0 瓦当厚：3.0

2-40 (2036) 本薬師寺
偏行唐草文軒平瓦(裳階用)
残存幅：12.5 瓦当厚：4.3

2 飛鳥時代の瓦



2-41



2-42

2-41 (2230) 檜隈寺 (奈良県)
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：18.5 瓦当厚：3.8

2-42 (2423) 大官大寺 (奈良県)
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：30.5 瓦当厚：6.8



2-43



2-44

2-43 (2219) 大官大寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：14.3 瓦当厚：5.8

2-44 (2051) 大官大寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：21.8 瓦当厚：5.0



2-45



2-46

2-45 (2430) 大官大寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：19.1 瓦当厚：7.0

2-46 (3102) 飛鳥寺 (奈良県)
素文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.4 瓦当厚：2.4



2-47



2-48

2-47 (2182) 吉備寺
複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：14.6 瓦当厚：2.3

2-48 (4929) 法起寺 (奈良県)
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (小型)
残存径：4.2 瓦当厚：2.5

2 飛鳥時代の瓦



2-49



2-50

2-49 (2185) 下野薬師寺 (栃木県)
面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：6.2 瓦当厚：5.3

2-50 (281) 下野薬師寺
三重弧文軒平瓦
残存幅：6.5 瓦当厚：3.6



2-51



2-52

2-51 (2327) 下野薬師寺
面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：9.7 瓦当厚：2.3

2-52 (2077) 下野薬師寺
面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：6.1 瓦当厚：2.2



2-53



2-54

2-53 (2072) 常陸新治廃寺 (茨城県)
面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：13.5 瓦当厚：3.0

2-54 (2046) 下総結城廃寺 (茨城県)
面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.8 瓦当厚：5.8



2-55



2-56

2-55 (2522) 医王寺 (愛知県)
重圈文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.1 瓦当厚：2.8

2-56 (430) 和泉寺 (大阪府)
素文珠文縁素弁十六葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.3 瓦当厚：2.2

2 飛鳥時代の瓦



2-57



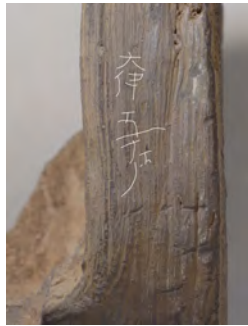
2-58

2-57 (324) 千代廃寺 (神奈川県)
重圏文線鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：19.6 瓦当厚：2.7

2-58 (347) 千代廃寺
重圏文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦
復元径：18.8 瓦当厚：3.4



2-59



2-60

2-59 (321) 千代廃寺
「大伴五十戸」銘重圏文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦
直径：19.4 瓦当厚：1.0
清地涼太氏撮影

2-60 (321) 「大伴五十戸」文字部分
拡大
清地涼太氏撮影



2-61



2-62

2-61 (230) 千代廃寺
重圏文鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：5.6 瓦当厚：1.4

2-62 (221) 千代廃寺
重圏文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦
復元径：20.4 瓦当厚：1.2



2-63



2-64

2-63 (223) 千代廃寺
重圏文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.2 瓦当厚：1.0

2-64 (217) 千代廃寺
重圏文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦
残存径：4.6 瓦当厚：1.3

3 奈良・平安時代の瓦



平城宮軒丸瓦 図版 3-9 (329)



平城宮軒丸瓦 図版 3-11 (460)

奈良時代は、平城宮や大安寺・薬師寺・興福寺・東大寺等の京内寺院の造営、各国国分寺の創建などに伴い、オリジナリティーにあふれた瓦が大量に作られた時期であり、古代瓦の黄金期と言っても過言ではない。前場コレクションにおいても奈良時代の瓦が最も多く、特に国分寺は全国をほぼ網羅している。

奈良時代を代表する平城宮の軒先瓦は 20 点ある。また平城京内寺院の瓦には大安寺・興福寺・東大寺の瓦があるが、中でも東大寺の瓦は大佛殿と西塔の両者の創建瓦がある。なお、平城京には軒丸瓦で 150 種、軒平瓦で 120 種ほどの文様があるが、非常によく似た文様のもも多い。これは、都の造営という大規模な工事において、手作業での瓦作りをいかに効率良く、かつ美観を損なわないようにするかを求めた結果であろう。すなわち、多くの瓦工人が異なる瓦範を使って製作しても、よく似た文様の瓦範であるため、瓦を屋根に葺いた時、統一性のある美しい景観が保たれたのである。

次に国分寺の瓦である。国分寺の瓦は、北は陸奥から南は大隅までのものが揃っている。国分寺の軒先瓦には、平城宮・京と同範（同じ型から作られた、まったく同じ文様のもの）もしくは、よく似た文様をもつものがある。安芸国分寺の軒丸瓦 2 種は、平城京と同範関係にある。また、信濃国分寺の軒丸瓦は東大寺と酷似しており、セットの軒平瓦は西隆寺と同範である。上総国分寺の単弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセットは、長屋王邸で使われた軒先瓦のセットと文様がよく似ており、常陸国分寺の軒平瓦は、大安寺の系譜を引くものである。以上のような例があるが、そもそも都の瓦の文様が無秩序に京外で使われることはなく、平城宮・京と同範または同系の瓦が存在する意味は大きい。国分寺造営は一大国家プロジェクトであったため、中央政府の直接的な関与があったことが瓦の文様に表れている。他方、新羅の影響が見てとれる下総・出雲の例や、独白色が非常に強い遠江・陸奥の例など都の文様と関連がないものもある。これらの違いは、各国国分寺の造営事情（中央政府の関与や造営主体のあり方）が反映した結果であろう。

前場コレクションには、東大寺と信濃国分寺、大安寺と常陸国分寺、上総国分寺と平城宮・京の同系関係が確認できる資料がある。また遠江の軒平瓦の資料群はすべて同系の文様で、S 字文と呼ばれるその文様に強いこだわりが見

えて興味深い。常陸国分寺関連の資料（常陸国分寺・茨城廃寺・新治廃寺・山尾権現山廃寺）は質・量共に秀逸で、国分寺造営期の常陸の国のあり方を語ることができる。

国分寺以外の地方の寺院に目を向けると、下野薬師寺の線鋸歯文珠文縁復弁八葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦がある。下野薬師寺は下野国河内郡に建てられた飛鳥時代の寺院であるが、戒壇（正式な僧尼となるための戒律を授ける場所）が設置された寺、道鏡が配流された寺としても知られている。奈良時代に官寺化され、その際に興福寺と同範の軒先瓦が導入された。その文様の系譜を引きながら在地で製作されたのが、この軒丸・軒平瓦のセットである。このセットは、同系の瓦が下野国内さらには下総国・常陸国にも広がり、下野薬師寺が核となる寺院であったことがうかがえる。

（森本）



東大寺大佛殿軒丸瓦 図版 3-37 (335)



信濃国分寺軒丸瓦 図版 3-156 (432)



大安寺軒平瓦 図版 3-26 (2218)



常陸国分寺軒平瓦 図版 3-122 (353)

3 奈良・平安時代の瓦



3-1



3-2

3-1 (3104) 平城宮
線鋸齒文珠文縁単弁十二葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.0 瓦当厚：3.1

3-2 (2540) 平城宮
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：14.6 瓦当厚：3.2



3-3



3-4

3-3 (2059) 平城宮(岡寺?)
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.2 瓦当厚：4.1

3-4 (461) 平城宮
線鋸齒文珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：13.1 瓦当厚：2.6



3-5



3-6

3-5 (2136) 平城宮
線鋸齒文珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：13.6 瓦当厚：2.4

3-6 (2126) 平城宮
重圈文軒丸瓦
直径：18.1 瓦当厚：3.9



3-7



3-8

3-7 (214) 平城宮
重圈文軒丸瓦
直径：15.5 瓦当厚：2.5

3-8 (2534) 平城宮
重圈文軒丸瓦
復元径：14.6 瓦当厚：2.4

3 奈良・平安時代の瓦



3-9



3-10

3-9 (329) 平城宮
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.5 瓦当厚：3.0

3-10 (2609) 平城宮
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.4 瓦当厚：3.5



3-11



3-12

3-11 (460) 平城宮
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：15.4 瓦当厚：2.8

3-12 (2114) 平城宮
凸鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.5 瓦当厚：4.1



3-13



3-14

3-13 (2546) 平城宮
凸鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：6.0 瓦当厚：6.4

3-14 (2184) 平城宮
凸鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.4 瓦当厚：2.7



3-15



3-16

3-15 (2478) 平城宮
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.0 瓦当厚：5.9

3-16 (2138) 平城宮
丸瓦
長さ：37.7 厚さ：2.3

3 奈良・平安時代の瓦



3-17



3-18

3-17 (2340) 平城宮
均整唐草文軒平瓦
残存幅：20.8 瓦当厚：5.7

3-18 (2319) 平城宮
均整唐草文軒平瓦
残存幅：26.3 瓦当厚：4.6



3-19



3-20

3-19 (2137) 平城宮
均整唐草文軒平瓦
残存幅：26.3 瓦当厚：8.4

3-20 (2265) 平城宮
均整唐草文軒平瓦
残存幅：15.6 瓦当厚：7.5



3-21



3-22

3-21 (2223) 平城宮
均整唐草文軒平瓦
残存幅：13.2 瓦当厚：5.2

3-22 (2150) 平城宮
仏像片
長：14.3 幅：13.2 奥行：7.6



3-23



3-24

3-23 (2935) 甲賀寺（滋賀県）
線鋸齒文縁単弁十七葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.0 瓦当厚：2.9

3-24 (512) 出土地不明
太宰府系鬼瓦
残存長：28.6 残存幅：28.6 厚さ：7.4

3 奈良・平安時代の瓦



3-25



3-26

3-25 (334) 大安寺
線鋸齒文珠文縁単弁十二葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.4 瓦当厚：4.4

3-26 (2218) 大安寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：19.1 瓦当厚：6.6



3-27



3-28

3-27 (363) 大安寺
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：27.4 瓦当厚：5.8

3-28 (2217) 大安寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：13.3 瓦当厚：5.8



3-29



3-30

3-29 (344) 大官大寺
素文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：20.0 瓦当厚：2.0

3-30 (917) 薬師寺
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.9 瓦当厚：3.6



3-31



3-32

3-31 (2037) 興福寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.4 瓦当厚：6.4

3-32 (2287) 興福寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：12.0 瓦当厚：5.4

3 奈良・平安時代の瓦



3-33



3-34

3-33 (2695) 興福寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：12.7 瓦当厚：4.9

3-34 (2085) 興福寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：8.0 瓦当厚：2.8



3-35



3-36

3-35 (2635) 興福寺(東大寺?)
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.0 瓦当厚：2.6

3-36 (2091) 東大寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.6 瓦当厚：4.9



3-37



3-38

3-37 (335) 東大寺大佛殿
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：19.8 瓦当厚：2.8

3-38 (2229) 東大寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：17.4 瓦当厚：6.1



3-39



3-40

3-39 (341) 東大寺西塔
珠文縁複弁十二葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.0 瓦当厚：2.6

3-40 (466) 唐招提寺
珠文縁単弁十六葉蓮華文軒丸瓦
直径：15.2 瓦当厚：2.9

3 奈良・平安時代の瓦



3-41



3-42

3-41 (325) 千代廃寺
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：9.5 瓦当厚：3.9

3-42 (345) 千代廃寺
珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：20.6 瓦当厚：2.6



3-43



3-44

3-43 (2323) 下野薬師寺
線鋸齒文珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.5 瓦当厚：3.3

3-44 (348) 下野薬師寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：21.0 瓦当厚：4.5



3-45



3-46

3-45 (2171) 常陸台渡里廃寺
素文縁単弁六葉蓮華文軒丸瓦
直径：6.4 瓦当厚：2.3

3-46 (2420) 常陸台渡里廃寺
重弧文軒平瓦（顎面施文）
残存幅：12.0 瓦当厚：5.2



3-47



3-48

3-47 (2515) 常陸新治廃寺
線鋸齒文縁単弁蓮華文軒丸瓦
残存径：7.7 瓦当厚：3.2

3-48 (333) 伊勢高田寺
珠文鋸齒文縁素弁十六葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.6 瓦当厚：3.6

3 奈良・平安時代の瓦



3-49



3-50

3-49 (360) 九頭神廃寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：29.3 瓦当厚：6.4

3-50 (2551) 和泉池田寺
唐草文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：15.8 瓦当厚：3.3



3-51



3-52

3-51 (338) 和泉池田寺
唐草文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：15.6 瓦当厚：4.5

3-52 (2331) 和泉池田寺
唐草文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：15.0 瓦当厚：3.5



3-53



3-54

3-53 (2261) 近江瀬田廃寺
珠文縁単弁蓮華文軒丸瓦
直径：18.4 瓦当厚：2.4

3-54 (2425) 近江軽野塔ノ塚廃寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：7.5 瓦当厚：4.9



3-55



3-56

3-55 (2442) 禅寂寺 (坂本寺、大阪府)
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：13.4 瓦当厚：5.0

3-56 (2559) 和泉小松里廃寺
線鋸齒文縁細弁十二葉蓮華文軒丸瓦
直径：15.7 瓦当厚：3.4

3 奈良・平安時代の瓦



3-57



3-58

3-57 (918) 三河国分寺塔跡
線鋸齒文珠文縁単弁六葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.2 瓦当厚：4.5

3-58 (2017) 三河国分寺塔跡
線鋸齒文珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.8 瓦当厚：6.4



3-59



3-60

3-59 (2019) 三河国分寺
珠文縁単弁六葉蓮華文軒丸瓦
復元径：18.8 瓦当厚：4.4

3-60 (2018) 三河国分寺
重圏文縁単弁六葉蓮華文軒丸瓦
残存径：9.0 瓦当厚：4.8



3-61



3-62

3-61 (2269) 三河国分寺
軒丸瓦
残存径：5.3 瓦当厚：3.4

3-62 (2111) 三河国分寺
鬼瓦片
残存長：7.5 残存幅 8.6 厚さ：4.3



3-63



3-64

3-63 (2022) 三河国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.0 瓦当厚：5.3

3-64 (2021) 三河国分寺
飛雲文軒平瓦
残存幅：9.2 瓦当厚：5.4

3 奈良・平安時代の瓦



3-65



3-66

3-65 (365) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：32.1 瓦当厚：5.2

3-66 (355) 遠江国分寺金堂跡
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：26.0 瓦当厚：5.8



3-67



3-68

3-67 (2702) 遠江国分寺塔跡
均整唐草文軒平瓦
残存幅：24.0 瓦当厚：5.1

3-68 (356) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：23.0 瓦当厚：5.0



3-69



3-70

3-69 (2706) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.5 瓦当厚：5.0

3-70 (2705) 遠江国分寺
重郭文軒平瓦
残存幅：8.1 瓦当厚：5.2



3-71



3-72

3-71 (2707) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：9.9 瓦当厚：5.7

3-72 (2803) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：9.1 瓦当厚：4.7

3 奈良・平安時代の瓦



3-73



3-74

3-73 (2712) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：20.5 瓦当厚：5.4

3-74 (2710) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：9.7 瓦当厚：4.0



3-75



3-76

3-75 (2801) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：12.7 瓦当厚：4.6

3-76 (2709) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：14.5 瓦当厚：4.6



3-77



3-78

3-77 (2800) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：9.0 瓦当厚：5.4

3-78 (2708) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：15.5 瓦当厚：6.0



3-79



3-80

3-79 (2714) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：7.9 瓦当厚：5.6

3-80 (2804) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：13.7 瓦当厚：6.9

3 奈良・平安時代の瓦



3-81



3-82

3-81 (2704) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：12.0 瓦当厚：5.4

3-82 (2713) 遠江国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：13.0 瓦当厚：4.8



3-83



3-84

3-83 (2188) 伊豆国分寺
重圈文縁单弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：5.6 瓦当厚：2.2

3-84 (2177) 伊豆国分寺
重弧文軒平瓦
残存幅：12.3 瓦当厚：4.8



3-85



3-86

3-85 (453) 相模国分寺
珠文縁单弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：10.6 瓦当厚：2.6

3-86 (1006) 相模国分寺
重圈文縁单弁五葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.0 瓦当厚：2.3



3-87



3-88

3-87 (467) 相模国分寺
忍冬唐草文軒平瓦
残存径：12.4 瓦当厚：4.6

3-88 (469) 相模国分寺
忍冬唐草文軒平瓦
残存径：11.7 瓦当厚：4.4

3 奈良・平安時代の瓦



3-89



3-90

3-89 (2579) 甲斐国分寺
重圈文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：10.5 瓦当厚：3.9

3-90 (2160) 甲斐国分寺
重圈文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.7 瓦当厚：2.0



3-91



3-92

3-91 (2578) 甲斐国分寺
重圈文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：6.8 瓦当厚：3.8

3-92 (2572) 甲斐国分寺
重郭文軒平瓦
残存幅：13.0 瓦当厚：9.3



3-93



3-94

3-93 (2573) 甲斐国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：7.8 瓦当厚：4.7

3-94 (2575) 甲斐国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：15.5 瓦当厚：7.1



3-95



3-96

3-95 (2590) 甲斐国分寺
鬼瓦片
残存長：10.1 残存幅：8.8 厚さ：6.1

3-96 (462) 上野国分寺
鬼瓦片
残存長：21.0 残存幅：14.4 厚さ：5.0

3 奈良・平安時代の瓦



3-97



3-98

3-97 (511) 武蔵国分寺
素文縁素弁蓮華文軒丸瓦
残存径：18.8 瓦当厚：2.3

3-98 (380) 武蔵国分寺
唐草文軒平瓦
残存幅：7.0 瓦当厚：3.3



3-99



3-100

3-99 (2109) 武蔵国分寺
唐草文軒平瓦
残存幅：13.2 瓦当厚：4.7

3-100 (2565) 武蔵国分寺
唐草文軒平瓦
残存幅：11.9 瓦当厚：4.3



3-101



3-102

3-101 (2104) 武蔵国分寺
唐草文軒平瓦
残存幅：11.5 瓦当厚：4.5

3-102 (2834) 武蔵国分寺
唐草文軒平瓦
残存幅：7.7 瓦当厚：7.6



3-103



3-104

3-103 (2073) 上総国分寺
重圈文軒丸瓦
復元径：15.4 瓦当厚：3.7

3-104 (2149) 上総国分寺
重郭文軒平瓦
残存幅：7.5 瓦当厚：5.5

3 奈良・平安時代の瓦



3-105



3-106

3-105 (2187) 上総国分寺
素文縁単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.0 瓦当厚：3.3

3-106 (2133) 上総国分寺
均整唐草文軒丸瓦
残存幅：11.5 瓦当厚：6.2



3-107



3-108

3-107 (2178) 上総国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：8.0 瓦当厚：4.4

3-108 (2115) 上総国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：14.3 瓦当厚：5.3



3-109



3-110

3-109 (2523) 下総国分寺
宝相華文軒丸瓦
残存径：7.9 瓦当厚：3.9

3-110 (2148) 下総国分寺
宝相華文軒平瓦
残存幅：9.2 瓦当厚：5.7



3-111



3-112

3-111 (2373) 常陸国分寺
素文珠文縁複弁十葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.5 瓦当厚：4.4

3-112 (914) 常陸国分寺
素文珠文縁単弁十八葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.0 瓦当厚：5.9

3 奈良・平安時代の瓦



3-113



3-114

3-113 (429) 常陸国分寺
素文珠文縁単弁十八葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.0 瓦当厚：4.1

3-114 (434) 常陸国分寺
素文珠文縁単弁十八葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.2 瓦当厚：4.1



3-115



3-116

3-115 (322) 常陸国分寺
素文珠文縁単弁十八葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.0 瓦当厚：5.7

3-116 (394) 常陸国分寺
素文珠文縁単弁十八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.0 瓦当厚：2.9



3-117



3-118

3-117 (2558) 常陸国分寺
素文珠文縁蓮華文軒丸瓦
復元径：16.4 瓦当厚：6.1

3-118 (343) 常陸国分寺
素文縁複弁十葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.5 瓦当厚：5.5



3-119



3-120

3-119 (924) 常陸国分寺
素文縁複弁十葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.7 瓦当厚：7.2

3-120 (336) 常陸国分寺
素文縁複弁十葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.4 瓦当厚：6.6

3 奈良・平安時代の瓦



3-121



3-122

3-121 (2082) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：16.2 瓦当厚：6.0

3-122 (353) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
下弦幅：30.8 瓦当厚：7.6



3-123



3-124

3-123 (349) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：22.1 瓦当厚：6.0

3-124 (2417) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：22.0 瓦当厚：7.4



3-125



3-126

3-125 (2083) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：14.6 瓦当厚：7.0

3-126 (2443) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：18.0 瓦当厚：5.9



3-127



3-128

3-127 (2338) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：18.8 瓦当厚：7.2

3-128 (2276) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.0 瓦当厚：5.7

3 奈良・平安時代の瓦



3-129



3-130

3-129 (909) 常陸国分寺
素文縁単弁二十葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.5 瓦当厚：2.3

3-130 (2060) 常陸国分寺
素文珠文縁素弁十五葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.7 瓦当厚：3.9



3-131



3-132

3-131 (2439) 常陸国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.9 瓦当厚：8.0

3-132 (940) 常陸国分寺
唐草文軒平瓦
残存幅：12.1 瓦当厚：7.0



3-133



3-134

3-133 (2039) 常陸国分寺
花唐草文軒平瓦
残存幅：16.3 瓦当厚：5.9

3-134 (915) 常陸新治廃寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：20.5 瓦当厚：6.0



3-135



3-136

3-135 (910) 常陸新治廃寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：12.5 瓦当厚：5.7

3-136 (2428) 常陸新治廃寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：12.2 瓦当厚：6.0

3 奈良・平安時代の瓦



3-137



3-138

3-137 (339) 中台廃寺 (茨城県)
素文縁細弁十六葉蓮華文軒丸瓦
直径：15.8 瓦当厚：5.8

3-138 (2243) 中台廃寺
重圈文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.0 瓦当厚：2.4



3-139



3-140

3-139 (2155) 中台廃寺
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.4 瓦当厚：2.1

3-140 (2161) 中台廃寺
素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：6.7 瓦当厚：1.9



3-141



3-142

3-141 (2186) 黒木田遺跡 (福島県)
素文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：20.8 瓦当厚：2.4

3-142 (2165) 石橋廃寺 (岐阜県)
素文縁素弁九葉蓮華文軒丸瓦
直径：18.4 瓦当厚：4.7



3-143



3-144

3-143 (906) 近江国分寺
珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：16.6 瓦当厚：3.9

3-144 (904) 出土地不明
珠文縁単弁十一葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.3 瓦当厚：2.1

3 奈良・平安時代の瓦



3-145



3-146

3-145 (2001) 山尾権現山廃寺(茨城県)
線鋸齒文縁変形蓮華文軒丸瓦
残存径：15.5 瓦当厚：4.1

3-146 (2263) 山尾権現山廃寺
線刻文軒平瓦
残存幅：17.9 瓦当厚：4.6



3-147



3-148

3-147 (238) 山尾権現山廃寺
唐草文軒平瓦
残存幅：21.8 瓦当厚：5.8

3-148 (239) 山尾権現山廃寺
唐草文軒平瓦
残存幅：26.0 瓦当厚：5.9



3-149



3-150

3-149 (428) 三村山極楽寺(岐阜県)
素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：10.9 瓦当厚：2.4

3-150 (905) 三村山極楽寺
素弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：10.6 瓦当厚：2.0



3-151



3-152

3-151 (237) 出土地不明
均整唐草文軒平瓦
残存幅：26.0 瓦当厚：6.1

3-152 (2013) 出土地不明
均整唐草文軒平瓦
残存幅：16.5 瓦当厚：6.7

3 奈良・平安時代の瓦



3-153



3-154

3-153 (354) 近江国分寺
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：27.0 瓦当厚：5.7

3-154 (2027) 美濃国分寺
丸瓦 (樽仏)
縦：12.0 横：15.8



3-155



3-156

3-155 (2213) 飛騨国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.7 瓦当厚：5.7

3-156 (432) 信濃国分寺
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：19.2 瓦当厚：3.6



3-157



3-158

3-157 (463) 信濃国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：25.6 瓦当厚：5.3

3-158 (8500) 信濃国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：14.0 瓦当厚：5.7



3-159



3-160

3-159 (8498) 信濃国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：10.9 瓦当厚：5.3

3-160 (8499) 信濃国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：14.0 瓦当厚：5.0

3 奈良・平安時代の瓦



3-161



3-162

3-161 (245) 上野国分尼寺
素文縁単弁五葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.4 瓦当厚：2.2

3-162 (241) 上野国分寺
素文縁単弁五葉蓮華文軒丸瓦
直径：15.2 瓦当厚：2.1



3-163



3-164

3-163 (2532) 上野国分寺
素文縁単弁蓮華文軒丸瓦
復元径：17.8 瓦当厚：1.8

3-164 (243) 上野国分寺
素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦
復元径：17.6 瓦当厚：2.1



3-165



3-166

3-165 (328) 上野国分寺
素文縁蓮華文軒丸瓦
直径：14.7 瓦当厚：2.8

3-166 (247) 上野国分寺
重弧文軒平瓦
残存幅：18.4 瓦当厚：4.6



3-167



3-168

3-167 (249) 上野国分寺
飛雲文軒平瓦
残存幅：13.6 瓦当厚：3.5

3-168 (352) 上野国分寺
飛雲文軒平瓦
残存幅：18.8 瓦当厚：4.6

3 奈良・平安時代の瓦



3-169



3-170

3-169 (250) 上野国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：18.5 瓦当厚：5.3

3-170 (251) 上野国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：15.0 瓦当厚：4.7



3-171



3-172

3-171 (351) 上野国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：17.7 瓦当厚：4.0

3-172 (236) 上野国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：15.0 瓦当厚：4.2



3-173



3-174

3-173 (291) 下野国分寺
線鋸齒文縁細弁蓮華文軒丸瓦
残存径：4.8 瓦当厚：2.5

3-174 (2116) 下野国分寺
唐草文線複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：8.7 瓦当厚：5.0



3-175



3-176

3-175 (273) 下野国分寺
唐草文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.9 瓦当厚：2.0

3-176 (274) 下野国分寺
唐草文縁素弁十葉蓮華文軒丸瓦
復元径：20.0 瓦当厚：1.9

3 奈良・平安時代の瓦



3-177



3-178

3-177 (280) 下野国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：8.5 瓦当厚：5.3

3-178 (279) 下野国分寺
飛雲文軒平瓦
残存幅：15.7 瓦当厚：4.8



3-179



3-180

3-179 (277) 下野国分寺
飛雲文軒平瓦
残存幅：19.3 瓦当厚：5.8

3-180 (2176) 下野国分寺
飛雲文軒平瓦
残存幅：15.5 瓦当厚：5.3



3-181



3-182

3-181 (278) 下野国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：18.0 瓦当厚：5.5
凸面に「国分寺」叩き痕あり

3-182 (2336) 下野国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：14.1 瓦当厚：3.8



3-183



3-184

3-183 (2526) 陸奥国分寺
素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
残存径：7.8 瓦当厚：3.0

3-184 (2539) 陸奥国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：10.0 瓦当厚：5.2

3 奈良・平安時代の瓦



3-185



3-186

3-185 (332) 備中国分寺
線鋸齒文縁複単弁蓮華文軒丸瓦
復元径：15.6 瓦当厚：3.4

3-186 (2084) 備中国分寺
均整唐草文軒平瓦
残存幅：17.7 瓦当厚：5.0



3-187



3-188

3-187 (2216) 出雲国分寺
草花文軒平瓦
残存幅：11.5 瓦当厚：8.0

3-188 (364) 出雲国分寺
草花文軒平瓦
上弦幅：22.5 瓦当厚：6.7



3-189



3-190

3-189 (358) 大隅国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：16.7 瓦当厚：4.3

3-190 (357) 大隅国分寺
偏行唐草文軒平瓦
残存幅：9.5 瓦当厚：5.0

3 奈良・平安時代の瓦



3-191



3-192

3-191 (911) 三河国府
珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：15.8 瓦当厚：2.8

3-192 (2518) 三河国府
珠文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：15.5 瓦当厚：1.7



3-193



3-194

3-193 (2034) 三河国府
忍冬唐草文軒平瓦
残存幅：15.0 瓦当厚：3.4

3-194 (2421) 近江国府
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：26.0 瓦当厚：6.2



3-195



3-196

3-195 (2342) 近江国府
均整唐草文軒平瓦
残存幅：19.0 瓦当厚：7.1

3-196 (2525) 多賀城
素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦「相」
残存径：9.7 瓦当厚：3.7
「相」銘あり

3 奈良・平安時代の瓦



3-197



3-198

3-197 (464) 出土地不明
珠文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦
直径：16.5 瓦当厚：2.2

3-198 (361) 出土地不明
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：19.5 瓦当厚：5.8



3-199



3-200

3-199 (2035+2089) 平安宮
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：26.3 瓦当厚：6.0

3-200 (2256) 出土地不明
劍頭文軒丸瓦
直径：14.2 瓦当厚：2.4



3-201



3-202

3-201 (2042) 法勝寺(京都府)
珠文縁複弁五葉蓮華文軒丸瓦
直径：17.0 瓦当厚：2.6

3-202 (2422) 出土地不明
均整唐草文軒平瓦
上弦幅：25.0 瓦当厚：8.4



3-203



3-204

3-203 (2277) 下醍醐寺(京都府)
巴文軒丸瓦
残存径：11.3 瓦当厚：2.3

3-204 (2143) 興福寺
巴文軒丸瓦
残存径：13.0 瓦当厚：2.3

4 文字瓦



下野国分寺文字瓦「国分寺」 図版 4-18 (396)

前場コレクションの文字瓦には、武蔵国分寺の郡名文字瓦「埼(埼玉)」・「父(秩父)」・「榛(榛沢)」・「入(入間)」・「荏(荏原)」がある。武蔵国分寺の創建期には国内全郡(設置が遅れる新羅郡は除く)の郡名文字瓦があるが、これは瓦の生産費用を負担した郡名を記したもので、国分寺造営の負担が郡単位に課されていたことの表れと考えられている。

同様の郡名文字瓦は下野国分寺にもあり、前場コレクションの「都(都賀)」・「足(足利)」・「寒川(寒川)」・「川(寒川か)」・「安□(安蘇)」がそれにあたる。下野国分寺の創建初期は、国分寺造営以前から生産実績のある国内各郡の瓦屋から瓦の供給を受けている。そして造営が本格化するに従い瓦屋は集約され、瓦は一ヶ所で生産されるようになり、補修期は三叢山麓窯跡群周辺の瓦屋から瓦が供給された。下野国分寺の補修瓦「国分寺」・「国分寺瓦」銘文字瓦や下野薬師寺の「薬師寺瓦」銘文字瓦等は、一ヶ所の瓦屋が複数の供給先に向けて瓦を生産する場合に、供給先を識別できるように記された文字と考えられる。

下野の上神主廃寺は長らく寺院跡ととらえられ、ここから出土する人名文字瓦は「知識(善業を積むために寺院等の建設に金品を寄進すること)」によるものと考えられてきた。しかし近年の発掘調査の結果、上神主廃寺は寺院跡ではなく官衙跡であることがわかったため、人名文字瓦を知識物ととらえることは難しくなった。しかし、行基が建てた大野寺土塔から出土する人名文字瓦は「知識」の証として記名されたものと考えられており、実際に「知識」と書かれた文字瓦も出土している。

このように文字瓦の性格は一樣ではなく、慎重に判断する必要がある。

(森本)

4 文字瓦



4-1 (2835) 武蔵国分寺
郡名文字瓦 (平瓦)「埼」
長さ：18.0 幅：13.0 厚さ：2.0

4-2 (382) 武蔵国分寺
郡名文字瓦 (平瓦)「父」
長さ：12.0 幅：26.7 厚さ：2.8



4-3 (379) 武蔵国分寺
郡名文字瓦 (丸瓦)「榛」
長さ：14.3 幅：14.7 厚さ：1.8

4-4 (377) 武蔵国分寺
郡名文字瓦 (丸瓦)「入」
長さ：11.2 幅：6.9 厚さ：2.1



4-5 (368) 武蔵国分寺
郡名文字瓦 (平瓦)「荏」
長さ：16.2 幅：10.7 厚さ：2.4

4-6 (383) 武蔵国分寺
郡名文字瓦 (平瓦)「荏」
全長：38.0 幅：20.0 厚さ：2.5



4-7 (269) 上野国分寺
文字瓦 (丸瓦)「手」
長さ：41.2 幅：21.0 厚さ：2.4

4-8 (271) 上野国分寺
文字瓦 (平瓦)「杖人」
長さ：39.0 幅：29.0 厚さ：2.5

4 文字瓦



4-9



4-10

4-9 (260) 上野国分寺
文字瓦(平瓦)「武□」
長さ:10.0 幅:9.5 厚さ:2.7

4-10 (262) 上野国分寺
文字瓦(平瓦)「大」
長さ:17.8 幅:18.0 厚さ:1.8



4-11



4-12

4-11 (254) 上野国分寺
文字瓦(丸瓦)「富」
長さ:20.3 幅:15.4 厚さ:2.9

4-12 (256) 上野国分寺
文字瓦(丸瓦)判読不明
長さ:9.0 幅:9.5 厚さ:1.9



4-13



4-14

4-13 (286) 下野国分寺
郡名文字瓦(丸瓦)「都」
長さ:9.3 幅:7.7 厚さ:1.7

4-14 (283) 下野国分寺
郡名文字瓦(丸瓦)「足」
長さ:16.9 幅:11.5 厚さ:1.9



4-15



4-16

4-15 (288) 下野国分寺
郡名文字瓦(丸瓦)「寒川」
長さ:16.4 幅:14.0 厚さ:2.3

4-16 (2867) 下野国分寺
郡名文字瓦(平瓦)「川」
長さ:17.0 幅:16.5 厚さ:1.5

4 文字瓦



4-17



4-18

4-17 (264) 下野国分寺
郡名文字瓦 (平瓦)「安□」
長さ：14.3 幅：13.9 厚さ：1.8

4-18 (396) 下野国分寺
文字瓦 (平瓦)「国分寺」
長さ：23.2 幅：12.5 厚さ：2.9



4-19



4-20

4-19 (402) 下野国分寺
文字瓦 (平瓦)「薬師寺瓦」
長さ：10.0 幅：10.5 厚さ：2.4

4-20 (289) 常陸新治廃寺
文字瓦 (丸瓦)「鳥」
長さ：20.0 幅：16.3 厚さ：2.0



4-21



4-22

4-21 (385) 下野上神主廃寺
人名文字瓦 (平瓦)
長さ：12.0 幅：13.6 厚さ：1.5

4-22 (374) 下野上神主廃寺
人名文字瓦 (平瓦)
長さ：12.3 幅：8.5 厚さ：2.0



4-23



4-24

4-23 (2859) 陸奥多賀城廃寺
文字瓦 (丸瓦)「下」
長さ：14.7 幅：14.0 厚さ：2.3

4-24 (441) 陸奥多賀城
文字瓦 (平瓦)「人」
長さ：26.0 幅：22.0 厚さ：2.9

5 中・近世以降の瓦



五三桐文軒丸瓦（金箔瓦、大坂城） 図版 5-6（331）

前場コレクションの鎌倉時代以降の瓦は、近世城郭の資料と次章でまとめて扱う鬼瓦が主体である。なかでも、一括性の高いものとして注目されるのが、小田原城と豊臣秀吉の一夜城として知られる神奈川県小田原市の石垣山城の資料群である。

まず、鎌倉～室町期では鶴岡八幡宮のものや播磨の林崎三本松瓦窯産と考えられるものがあり、巴文が多い軒丸瓦には埼玉県慈光寺などの資料がある。安土・桃山時代で特筆されるのは大坂城の五三桐文軒丸瓦で、瓦当面には金箔と下地の漆が明瞭に残っており、豊臣秀吉の権勢をしのぼせる資料である。この時期に該当する石垣山城の瓦は約 110 点にのぼり、築造状況を知る手掛かりとなりうる良好な資料であるが、金子智氏の調査により、江戸期の瓦も存在することが明らかになった。また小田原城の瓦は 430 点あまりで、三葉葵の軒丸瓦、文政 4（1821）年の刻印がある瓦、大坂の瓦工房や製作者名が刻印された瓦が含まれている。このほか、江戸期では相馬中村城、鶴ヶ城、沼津城、彦根城、広島城、飢肥城など各地のものがある。このほか、福井県丸岡城の石製瓦や、備前焼でつくられた獅子文留蓋瓦など類例が少ないものもある。

明治期に導入されたフランス系の瓦は 13 点あり、初めて日本で生産された西洋瓦として著名なジェラルール瓦は 10 点である。1865 年の刻印があるフランス製のものと、1878 年、1887 年の横浜製のものがある。刻印がない日本洋瓦会社製の瓦は愛知県三州で生産されたもので、ジェラルール瓦とは系統が異なる。

（忽那）

5 中・近世以降の瓦



5-1



5-2

5-1 (362) 鶴岡八幡宮
均整唐草文軒平瓦
時代：鎌倉
上弦幅：25.6 瓦当厚：6.9

5-2 (2207) 無量寿院（京都府）
連珠三巴文軒丸瓦
時代：鎌倉？
復元径：13.0 瓦当厚：4.3
大和産



5-3



5-4

5-3 (2038) 出土地不明
均整唐草文軒平瓦
時代：鎌倉
残存幅：20.4 瓦当厚：7.3
林崎三本松瓦窯（播磨）産

5-4 (2548) 出土地不明
連珠三巴文軒丸瓦
時代：室町？
直径：14.0 瓦当厚：1.4



5-5



5-6

5-5 (2848) 慈光寺（埼玉県）
三巴文軒丸瓦
時代：室町？
直径：13.8 瓦当厚：9.4

5-6 (331) 大坂城
五三桐文軒丸瓦（金箔瓦）
時代：安土・桃山
直径：18.3 瓦当厚：1.7



5-7



5-8

5-7 (330) 出土地不明
巴文軒丸瓦（金箔瓦）
時代：安土・桃山？
残存径：6.5 瓦当厚：1.6

5-8 (5370) 伏見城
五三桐紋軒丸瓦
時代：安土・桃山～江戸（16世紀後半～
17世紀前半）
直径：18.9 瓦当厚：2.1 長さ：40.3

5 中・近世以降の瓦



5-9



5-10

5-9 (2985) 石垣山城跡 (神奈川県)
連珠三巴文軒丸瓦
時代：安土・桃山
復元径：15.0 瓦当厚：4.9

5-10 (2996) 石垣山城跡
均整唐草文軒平瓦
時代：安土・桃山
残存幅：17.6 瓦当厚：5.1



5-11



5-12

5-11 (2986) 石垣山城跡
連珠三巴文軒丸瓦
時代：江戸 (18世紀中葉)
直径：13.5 瓦当厚：3.0

5-12 (2410) 小田原城跡
三葉葵紋軒丸瓦
時代：江戸 (19世紀)
直径：19.8 瓦当厚：2.4 長さ：30.0



5-13



5-14

5-13 (3091) 小田原城跡
均整唐草文隅軒平瓦
時代：文政4 (1821) 年
残存幅：24.5 瓦当厚：6.6

5-14 (7168) 小田原城跡
均整唐草文軒平瓦
時代：江戸 (19世紀)
残存幅：17.4 瓦当厚：7.4
「大坂瓦師太郎左衛門」の刻印



5-15



5-16

5-15 (2314) 相馬中村城 (福島県)
九曜紋軒丸瓦
時代：江戸 (17～18世紀)
直径：15.6 瓦当厚：5.3

5-16 (2925) 熊本城
連珠三巴文軒丸瓦
時代：江戸 (18～19世紀)
直径：14.6 瓦当厚：1.5 長さ：37.0

5 中・近世以降の瓦



5-17



5-18

5-17 (8503) 丸岡城 (福井県)
 螻蛄羽瓦 (石製)
 時代: 江戸?
 幅: 43.2 高さ: 13.8

5-18 (1000) 出土地不明
 棟飾 備前焼獅子文留蓋瓦
 時代: 近世以降
 幅: 40.2 高さ: 93.4



5-19



5-20

5-19 (3115) ジェラルール瓦 (平瓦)
 フランス 時代: 江戸 (1865)
 表: "TRAST BRAND"
 裏: "PATENT 1865" "BASEL MISSION" "THE
 COMMON WEALTH TRAST LTD"
 長さ: 41.0 幅: 24.5

5-20 (3106) ジェラルール瓦 (平瓦)
 日本 (横浜) 時代: 明治
 "A GERARD YOKOHAMA"
 長さ: 28.6 幅: 20.7



5-21



5-22

5-21 (3114) ジェラルール瓦 (平瓦)
 日本 時代: 明治 11 年 (1878)
 "1878" "ALFRED GERARD A YOKOHAMA
 TUILERIE MECANIQUE"
 長さ: 40.4 幅: 24.0

5-22 (3117) ジェラルール瓦 (棟瓦)
 日本 (横浜) 時代: 明治 11 年 (1878)
 "1878 TUILERIE MECANIQUE ALFRED
 GERARD A YOKOHAMA"
 長さ: 44.8 幅: 16.6



5-23



5-24

5-23 (3112) ジェラルール瓦 (平瓦)
 日本 (横浜) 時代: 明治 20 年 (1887)
 "1887" "ALFLED GERARD A YOKOHAMA
 TUILERIE MECANIQUE"
 長さ: 40.1 幅: 23.7

5-24 (3116) フランス瓦 (平瓦)
 日本 (愛知) 時代: 明治
 日本洋瓦会社製
 長さ: 41.3 幅: 23.9

6 鬼瓦



金沢文庫?の鬼瓦（近世以降） 図版 6-5（173）

近世以降の鬼瓦は、その大きさのため葺き替え時に廃棄されることが多く保存されることはまれであるが、前場コレクションには約 200 点の鬼瓦があり、特色のひとつとなっている。主体となるのは明治期から現代までのもので、地域と造形のバリエーションが豊富である。生産地または使用されていた地域が判明しているのは、山梨・埼玉・神奈川・長野・福井・静岡・愛知・滋賀・奈良・和歌山・兵庫・香川・高知の各県にわたる。文様は鬼面が主であるが、他に梵字・漢字・打出の小槌・大黒天・茶道具・家紋・宝珠・巾着袋・橘などがある。多くが最大長 30～50cm に収まるサイズであるが、なかには単独で 80cm を超える個体や、複数の個体を組み合わせて 100cm 以上に達する大型品も見られる。コレクション中最大のものは金沢文庫の建物で使用されていたと伝えられる鬼瓦（図版 6-5）で、8 点のパーツで構成され、高さは 172cm、最大幅は 193.5cm に達する。

コレクションを実見した金子智氏によれば、江戸期の資料としては、文化 3 年（1806）3 月に伊勢国安芸郡中繩村の瓦工である家城金右衛門が三河国碧海郡浜尾村出身の平松久右衛門正保と製作したという記銘を側面にもつ資料がある（図版 6-6, 7）。また、年代が記されている資料としては宝暦 14 年（1764）銘（図版 6-2）があり、製作年代が明らかな資料として貴重であるという。このほか、記名はないものの 17 世紀中葉、18 世紀中葉と考えられるものがある。

コンクリート製のものは戦時中の代用品と伝えられているほか、素材が異なる資料として、銅板をかぶせたものや鉄製のものがある。いずれも近代以降の製品とみられる。

（忽那）

6 鬼瓦



6-1



6-2

6-1 (120) 鬼瓦
日本 時代：17世紀中葉
長さ：22.5 幅：55.5 厚さ：16.4

6-2 (130) 鬼瓦
滋賀県 時代：宝暦14年(1764)
長さ：49.2 幅：46.3 厚さ：39.0



6-3



6-4

6-3 (107) 鬼瓦
107+693
兵庫県 時代：江戸中～後期
長さ：39.0 幅：52.6 厚さ：23.2

6-4 (82) 鬼瓦
奈良県(壺坂寺?) 時代：18世紀前半
長さ：32.9 幅：58.7 厚さ：9.0



6-5



6-6

6-5 (173) 鬼瓦
83+84+101+173+654+692+694+698+699
神奈川県(金沢文庫?) 時代：近世以降
長さ：172.0 幅：193.5 厚さ：51.3

6-6 (695) 鬼瓦
103+116+695
愛知県? 時代：文化3年(1806)
長さ：86.5 幅：127.8 厚さ：32.7



6-7



6-8

6-7 (696) 鬼瓦
66+100+696
愛知県? 時代：文化3年(1806)
長さ：87.2 幅：126.8 厚さ：34.8

6-8 (642) 鬼瓦
愛知県 時代：18世紀後半
長さ：51.8 幅：85.0 厚さ：24.8

6 鬼瓦



6-9



6-10

6-9 (641) 鬼瓦
愛知県 時代：18世紀後半
長さ：56.0 幅：83.6 厚さ：24.5

6-10 (65) 鬼瓦
日本 時代：幕末～明治
長さ：34.6 幅：59.8 厚さ：24.7



6-11



6-12

6-11 (70) 鬼瓦
日本 時代：現代
長さ：50.5 幅：59.8 厚さ：19.8

6-12 (191) 鬼瓦
和歌山県 時代：近現代
長さ：27.0 幅：46.0 厚さ：14.0



6-13



6-14

6-13 (6148) 鬼瓦 (平)
日本 時代：近代以降
長さ：31.6 幅：19.2 厚さ：7.0

6-14 (645) 鬼瓦
香川県 時代：近代以降
長さ：16.4 幅：43.1 厚さ：11.7



6-15



6-16

6-15 (111) 鬼瓦
福井県 時代：近世以降
長さ：16.5 幅：40.0 厚さ：9.0

6-16 (147) 鬼瓦
埼玉県 時代：近世以降
長さ：26.0 幅：40.0 厚さ：10.5

6 鬼瓦



6-17



6-18

6-17 (168) 鬼瓦
長野県 時代：昭和
長さ：19.0 幅：30.0 厚さ：11.7

6-18 (195) 鬼瓦
静岡県 時代：近世以降
長さ：32.0 幅：84.5 厚さ：25.0



6-19



6-20

6-19 (2) 鬼瓦
山梨県 時代：近代
長さ：21.0 幅：42.0 厚さ：10.6

6-20 (703) 鬼瓦
神奈川県 時代：現代
長さ：98.0 幅：50.4 厚さ：40.2



6-21



6-22

6-21 (705) 鬼瓦 (塩焼き瓦)
愛知県 時代：昭和？
長さ：16.1 幅：40.7 厚さ：8.5

6-22 (129) 鬼瓦 (銅版葺き)
日本 時代：不明
長さ：20.0 幅：44.0 厚さ：9.1



6-23



6-24

6-23 (743) 鬼瓦 (鉄製)
日本 時代：不明
長さ：17.3 幅：40.2 厚さ：10.0

6-24 (713) 鬼瓦 (コンクリート製)
日本 時代：昭和戦時中
長さ：28.5 幅：12.0 厚さ：9.3

7 瓦製作道具

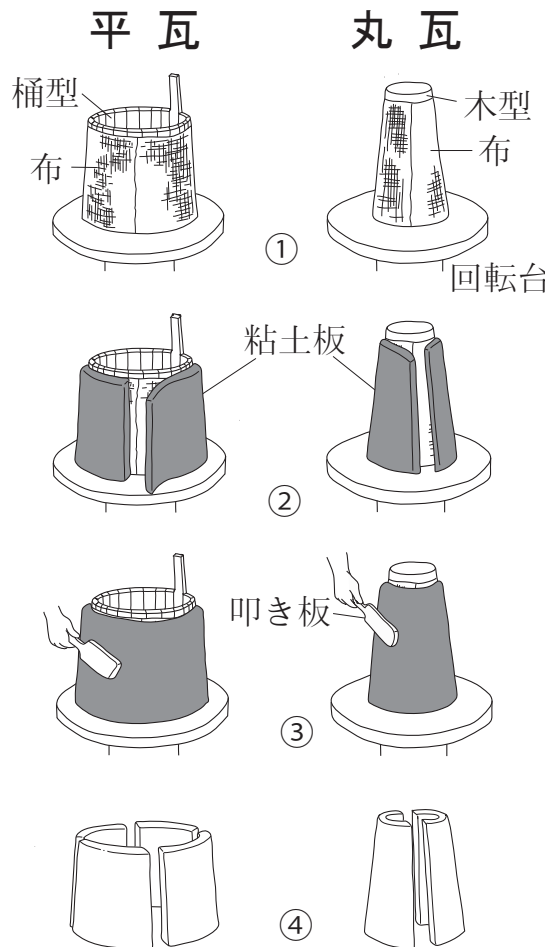


平瓦用桶型（中国・雲南省 現代） 図版 7-1（768-4）

前場コレクションには、中国雲南省で最近まで実際に使われていた瓦製作道具の数々がある。日本に瓦作りが初めて伝わったのは、6世紀末の奈良飛鳥寺建設の時である。その時の瓦作りの道具は現存しておらず、実際にどのような道具を使っていたかを知ることはできないが、古瓦に残る痕跡から中国雲南省のものと同様の道具を使い、同じ工程で作られたと推測される。

これらの道具を使った、日本の古代瓦の作り方は以下の通りである。

- ① 型を回転台の上に設置し、回しながら作業できるようにする。型に布をかぶせる。この布は後に型を粘土円筒からはずす時、型と粘土の離れをよくするためにかぶせるもので、古代瓦に布目がついているのはこのためである。また、平瓦の型は写真のように細い板を綴り合わせて作られているため、瓦にこの細板の痕が縦の線となって残る。
- ② 粘土を型に巻きつける。薄い板状に切り取った粘土板を巻きつける方法が一般的だが、粘土紐を巻きつけることもある。
- ③ 回転させながら叩き板で叩き締め、粘土内の空気を抜く。叩き板は「しゃもじ」のような形で、縄が巻かれたり格子文様が彫られたりしており、瓦にこの痕跡が残る。ただし、丸瓦はそれをきれいに消していることが多い。
- ④ 型と布をはずすと円筒状の粘土ができる。内側から鎌などで切れ目を入れて、平瓦なら4枚、丸瓦なら2枚に分割する。平瓦の型には把手があり、開閉できるようになっているが、これは型が円錐形で上の径が小さいため、型をすばめなければ粘土円筒から抜けないからである。また、型の周りには縦に細い棒がついている。4か所（丸瓦は2か所）あり、この痕が粘土円筒の内側につき、分割する位置の目印となる。
- ⑤ 分割後は、天日干ししてから窯で焼成する。飛鳥寺の造営時は「登り窯」が使われ、これは1000度以上の高温になり、300～500枚程度の瓦を窯詰できた。7世紀後半の藤原宮造営時には新形態の「平窯」が導入される。



瓦の製作方法（森本原図）

古代の瓦作りの工程は以上であるが、平瓦については、このような作り方を「桶巻作り」と呼んでいる。桶巻作りは飛鳥時代に主体的に用いられた技法であり、奈良時代になると次第にかまぼこ形の成型台で1枚ずつ作る「一枚作り」という新手法に取って代われ、それ以後、桶巻作りは日本の本州ではほとんど見られなくなる。しかし、中国や朝鮮半島などでは近年まで桶巻作り技法で平瓦が作られていた。日本では古くに廃れてしまった古代の瓦作りを現代に教えてくれるという意味で、この中国雲南省の瓦製作道具は非常に興味深く、価値のある資料と言える。

前場コレクションに含まれる瓦製作道具は、約50点あまりにのぼる。いずれも近現代の資料であるが、前場氏が中国の雲南省で収集した一連の瓦製作道具約20点は、一括性の高い資料として重要である。平瓦の製作にかかわるものは桶型・布・叩き板・なで具がある。叩き板の文様は、四角形の各辺を内側にくぼませた形に彫り込んで集中線で囲む文様を中心に配置し、上部に複数の沈線の間を斜線で充填した3列の直線文で飾るものや、直線文が斜め3列になるもの、波状文を主体とするもの、格子状のものなど複数あり、バラエティーに富む。軒平瓦に用いられたものとしては、渦文と波文を組み合わせた文様が彫り込まれた木範がある。軒丸瓦の文様をつけるために使用された陶範は、中心に花卉を配し、シンプルな線文で周囲を飾る。丸瓦用では木型・布がある。粘土を巻きつける部分の高さは25cmを測り、高さ29.7cmの平瓦用桶型とうまく組み合う。両者で作られた丸・平瓦はセットで屋根に葺かれたのであろう。

雲南省収集品以外の瓦製作道具には、軒丸瓦と軒平瓦の木範、瓦の成型台がある。一部中国とみられるものがあるが、多くが近現代の日本国内の資料とみられる。軒丸瓦の木範では、家紋や漢字（林、西、本など）、梵字のモチーフがある。軒平瓦では、唐草文や寺名を刻んだものがみられる。木製の瓦の成型台は16点を数え、長さが30cm前後のものから最大で42cm余りのものがあり、使用場所や建物の大きさによって使い分けられていたことが窺える。

（森本・忽那）

7 瓦製作道具



7-1



7-2

7-1 (768-4) 平瓦用桶型
中国雲南省 時代：現代
高さ：29.7 上円径：20.4

7-2 (768-1) 平瓦用布
中国雲南省 時代：現代
縦：29.0 横：34.2



7-3



7-4

7-3 (768-13) 平瓦用叩き板
中国雲南省 時代：現代
全長：37.8
(叩き板部 長さ：10.9 幅：7.7)

7-4 (768-9) 平瓦用なで具
中国雲南省 時代：現代
長さ：12.1 幅：9.5



7-5



7-6

7-5 (768-6) 丸瓦用木型
中国雲南省 時代：現代
高さ：38.0 幅：25.5
(丸瓦部 高さ：25.0 直径：7.5)

7-6 (768-2) 丸瓦用布
中国雲南省 時代：現代
縦：25.0 横：16.0



7-7



7-8

7-7 (768-19) 軒丸瓦の陶範
中国雲南省 時代：現代
直径：21.0 厚さ：6.3
(瓦当部 直径：15.0 深さ：1.8)
範型の両面に文様面あり

7-8 (768-5) 軒平瓦の木範
中国雲南省 時代：現代
縦：24.0 横：47.5
(軒平瓦部 縦：16.4 横：25.6)

7 瓦製作道具



7-9



7-10

7-9 (730) 軒丸瓦の木範
日本 時代：現代
直径：11.2 厚さ：5.0

7-10 (732) 軒丸瓦の木範
中国 時代：現代？
直径：18.4 厚さ：4.2



7-11



7-12

7-11 (734) 軒平瓦の木範
日本 時代：現代
上弦幅：42.5 瓦当厚：5.8

7-12 (738) 軒平瓦の木範
日本 時代：現代
上弦幅：42.6 瓦当厚：7.1



7-13



7-14

7-13 (735) 軒平瓦の木範
東寺宝蔵 時代：現代
上弦幅：42.5 瓦当厚：7.7
(瓦当面上弦幅：33.5)

7-14 (761-2) 瓦成型台
日本 時代：現代
高さ：20.5 長さ：29.8



7-15



7-16

7-15 (761-3) 瓦成型台
日本 時代：現代
高さ：17.5 長さ：42.4

7-16 (761-5) 瓦成型台
日本 時代：現代
高さ：19.5 長さ：30.7

8 瓦以外の考古資料



中広形銅矛（出土地不明） 8-4（9320）

瓦以外の考古資料は約 1,000 点に及び、内容も縄文時代の土器や石器から近代の陶磁器まで時代も種類も幅広い。点数としては、やはり同じやきものとして瓦と関連する土器が多く、古代や近世の窯跡から採集した須恵器や陶磁器の破片資料が大半を占めるが、それ以外にもほぼ完全な形を保っていたり、出土地が判明しているものなど資料的価値が高いものも少なくない。

縄文時代では、土器・石棒・土偶・石皿などがある。石棒は全長が 1 m に達する大型の個体のほか、厚木市周辺出土とされる破片資料がある。土偶は頭部のみで、神奈川県や東京都のものが含まれる。弥生時代では、全国的にも類例が少ない手焙形土器があり、出土地が明らかで、なおかつほぼ完全な形状を保っている点で重要である。中広形銅矛は破損部分が多いが全長が復元でき、錆も少ない良好な状態の資料である。古墳時代に該当するものは土器が多い。伊予国分尼寺付近の須恵器坏身や伝埼玉県將軍塚古墳の伽耶系とみられる長頸壺は、参考資料として有用である。また、厚木市天神谷戸横穴墓群の長頸瓶と小型高坏は厚木市史掲載の資料である。

このほか、出土地不明ながら関東地方のものと思われる鬼高期の土師器、家・馬・鞍・円筒といった各種の埴輪片がある。古代以降では瓦経片、緑釉がかかった四耳壺、梵字が記された一字一石経や土製の碁石経がある。まとまったものとしては中世の板碑が 15 点あり、判読可能な年代は正中 2 年（1325）から文明 13 年（1481）にわたる。考古資料ではないが、西郷隆盛の肖像画を数多く描いたことで知られる服部英龍の「西郷隆盛南洲翁兎狩図」は、明治 18 年（1885）の作と伝えられる。

（忽那）

8 瓦以外の考古資料



8-1



8-2

8-1 (8610) 縄文土器・深鉢
東北地方? 時代:縄文
幅:16.3 高:28.5

8-2 土偶 時代:縄文
(517) 幅:5.8 高:6.7
(515) 幅:7.6 高:6.4 (神奈川県久保屋敷遺跡)
(523) 幅:7.2 高:6.2
(520) 幅:5.9 高:6.8
(519) 幅:8.6 高:6.6
(516) 幅:6.5 高:7.3 (東京都多摩鎌水)



8-3



8-4

8-3 (178+186) 石棒
日本 時代:縄文
長さ:102.6 幅:22.0 厚さ:19.4

8-4 (9320) 中広形銅矛
日本 時代:弥生
長さ:73.3 幅:5.7 厚さ:3.2



8-5



8-6

8-5 (529) 手焙形土器
愛知県(伝安城市桜井) 時代:弥生末~古墳初頭
幅:15.0 高さ:15.0

8-6 (8595) 家形埴輪
日本 時代:古墳
長さ:38.1 幅:26.0 厚さ:1.7



8-7



8-8

8-7 (752) 長頸壺(伽耶系?)
埼玉県(伝將軍塚古墳) 時代:古墳
幅:27.5 高さ:37.0

8-8 (8608) 須恵器・杯身
愛媛県(伊予国分尼寺付近) 時代:古墳
幅:14.5 高さ:4.9

8 瓦以外の考古資料



8-9



8-10

8-9 (8611) 須恵器・長頸瓶
神奈川県(天神谷戸横穴墓群) 時代：古墳
高さ：20.0 口径：8.8 胴径：15.0

8-10 (442) 瓦経
日本 時代：古代
長さ：9.2 幅：7.2



8-11



8-12

8-11 (8612) 四耳壺
日本 時代：中世
高さ：28.2 口径：10.5 胴径：19.0

8-12 (9337) 板碑
日本 時代：正中2年(1325)
長さ：58.2 幅：23.0



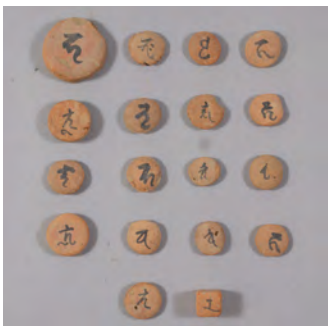
8-13



8-15

8-13 (9327) 板碑
日本 時代：延文元年(1356)
長さ：21.5 幅：10.0

8-14 (749) 土製基石経
日本 時代：不明
左上 直径：3.3 厚さ：0.8



8-14

8-15 (9321) 故参議兼陸軍大将近衛
都督 西郷隆盛南洲翁兔狩図
日本 時代：明治18年(1885)
作：服部英龍
長さ：137.0 幅：52.0

参考文献

- 井内古文化研究室（1976）『朝鮮瓦埴図譜 1（楽浪 帯方）』
- 井内古文化研究室（1976）『朝鮮瓦埴図譜 2（高句麗）』
- 井内古文化研究室（1978）『朝鮮瓦埴図譜 3（百済・新羅1）』
- 井内古文化研究室（1977）『朝鮮瓦埴図譜 4（新羅2）』
- 井内古文化研究室（1977）『朝鮮瓦埴図譜 5（新羅3）』
- 井内古文化研究室（1978）『朝鮮瓦埴図譜 6（高麗・李朝）』
- 井内古文化研究室（1981）『朝鮮瓦埴図譜 7（総説）』 92p. 図 67 枚
- 上原真人（1997）『歴史発掘 11 瓦を読む』 174p. 講談社
- 梶原義実（2010）『国分寺瓦の研究』 339p. 名古屋大学出版会
- 関東古瓦研究会（1994）『関東の国分寺 資料編』 192p.
- 関東古瓦研究会（1997）『関東の初期寺院』 397p.
- 古谷徳彦（2013）「内裏野地区の第2期瓦について」『立命館大学考古学論集VI 和田晴吾先生定年退職記念論集』 pp.409-417. 立命館大学考古学論集刊行会
- 鈴木知子・森本尚子（2012）「古代瓦の作り方ー前場幸治コレクションー」『ミュージアムアイズ Vol. 58』 p.13. 明治大学博物館
- 鈴木知子・森本尚子（2013）「鬼龍子と龍生九子ー前場幸治コレクションー」『ミュージアムアイズ Vol. 60』 p.13. 明治大学博物館
- 須田 勉・佐藤 信（2011）『国分寺の創建 思想・制度編』 386p. 吉川弘文館
- 須田 勉・佐藤 信（2013）『国分寺の創建 組織・技術編』 452p. 吉川弘文館
- 前場幸治（1980）『古瓦を追ってー相模国分寺、千代台廃寺考ー』 182p. 前場幸治
- 角田文衛（1986）『新修国分寺の研究 1 東大寺と法華寺』 383p. 吉川弘文館
- 角田文衛（1991）『新修国分寺の研究 2 畿内と東海道』 399p. 吉川弘文館
- 角田文衛（1991）『新修国分寺の研究 3 東山道と北陸道』 375p. 吉川弘文館
- 角田文衛（1991）『新修国分寺の研究 4 山陽道と山陰道』 383p. 吉川弘文館
- 角田文衛（1987）『新修国分寺の研究 5 上 南海道』 401p. 吉川弘文館
- 角田文衛（1987）『新修国分寺の研究 5 下 西海道』 524p. 吉川弘文館
- 角田文衛（1996）『新修国分寺の研究 6 総括』 739p. 吉川弘文館
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館（1999）『蓮華百相 瓦からみた初期寺院の成立と展開』 94p.
- 奈良国立博物館（1980）『国分寺』 169p.
- 奈良国立文化財研究所（1996）『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 169p.
- 八王子市郷土資料館（1982）『井上コレクションの古瓦』 110p. 八王子市教育委員会
- 山路直充（2009）「「大伴五十戸」と記銘された軒丸瓦」『駿台史学』 137, pp.49-72. 駿台史学会

Yukiji Zemba Collection Catalog of Tiles

Abstract

This catalog describes representative materials from the Yukiji Zemba tile collection donated to Meiji University in February 2010. Yukiji Zemba (1933-2011), who was a carpenter specialized in building shrines, temples, and palaces, and the former president of Zemba building firm, gifted to Meiji University a 10,000-piece collection primarily consisting of tiles dating from ancient to modern times. He, from three generations of carpenters and builders, was energetic in his collection and research of carpenter's tools, tiles, and archaeological materials. The collection is diverse, covering 1) ancient Japanese tiles; 2) Japanese tiles from medieval to modern times; 3) tiles from China and Korean Peninsula (ancient to modern); 4) modern tools for making tiles and roofing materials; 5) other archaeological materials (from the Jomon period to modern times); 6) classical books and paintings; and 7) tile stone rubbings and books. The Meiji University Museum has worked with the Meiji University Research Institute for Japanese Ancient Studies over three years to catalog and research the collection. This catalog contains representative items from each field covered by the collection.



明治大学博物館所蔵
前場幸治瓦コレクション資料目録

2014年3月31日発行

編著者 森本尚子・忽那敬三・山路直充
発行 明治大学博物館
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
TEL 03-3296-4448
印刷・製本 石井デザイン事務所
〒370-0844 群馬県高崎市和田多中町11-30-1
TEL 027-325-2178



Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM